

井上靖
の世界
福田宏年

井上靖の世界

昭和四十七年九月四日 第一刷発行

著者 福田宏年

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社／東京都文京区音羽二―二二―二／郵便番号／二二二

電話／東京(03)(九四五)一一一一(大代表) 振替／東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 六九〇円



© Hirotooshi Fukuda 1972. Printed in Japan 落丁本乱丁本はおとりかえいたしません。

目次

第一章 隠遁と行動

処女作 9 白い河床 13 インテリ

やくざ 20 遁世の血 26 行動人の

系譜 39

第二章 母性思慕

理想の女性像 49 同盟関係 59 生

きものの嗅覚 66 美しい叔母 69

第三章 劣等感情と文学の芽

痣 77 あすなろ 80 都会への気お

くれ 85 受験 87 詩のめざめ 90

柔道部生活 98

第四章 暗い青春

東京放浪 107 賞金稼ぎ 110 高安敬

義 114 結婚 120 学問の血 122 就

職 128

105

75

47

7

第五章 静かな醸成期

133

十年の空白 135 戦争体験 137 宗教

記者 142 美術記者 145 記者をおり

る 154 終戦 160 詩の噴出 163

第六章 絵画的イメージから歴史的運命観へ

173

絵画的性格 175 叙事的性格 181 生

の作家 192 白のイメージ 200 歴史

的運命観 207

終章 現代の作家

219

象徴的犠牲者 221 原存在 231

年譜

237

系図

278

あとがき

279

装
幀
原
弘

井上靖の世界

第一章 隱遁と行動

《処女作》

井上靖が『鬪牛』によって芥川賞を受賞して文壇に出たのは、昭和二十五年のことである。その前年の昭和二十四年に、井上靖は、「文学界」十月号に『獵銃』を、同十二月号に『鬪牛』を発表していた。

それより十数年前、京都帝大を卒業した昭和十一年に、井上は毎日新聞社の「サンデー毎日」の懸賞小説に『流転』を応募して当選し、千葉亀雄賞を得ている。しかし井上は、この『流転』以来きっぱりと小説の筆を断ち、『流転』入選の縁で毎日新聞社に入社し、新聞記者の生活に入った。終戦までの約十年間、折にふれて詩を発表することはあったが、小説は書いていない。それが終戦後、何が突如文学への情熱をかきたてたのか定かではないが、井上靖は十数年ぶりに小説の筆を執った。その時、井上は毎日新聞大阪本社の学芸部副部長を勤めていた。

『鬪牛』は、昭和二十二年の二月から三月にかけて執筆され、『獵銃』は、翌昭和二十三年の

一月に脱稿している。この『猟銃』と『闘牛』は、当時目黒書店から出ていた雑誌「人間」の懸賞小説に応募するために書いたものであり、二つの作品を二年続けて応募したが、いずれも選外佳作にとどまった。『闘牛』を応募した年の「人間」の当選作は、たしか駒田信二の『脱出』であったはずである。当時は戦争直後の極度の混乱期で、文学の面でも、戦争の硝煙の匂いをただよわせた、第一次戦後派の文学が全盛の頃であった。たとえば、野間宏の『顔の中の赤い月』や、椎名麟三の『深夜の酒宴』などが、その鮮烈で、ショックな作風で世間の耳目を集めていた頃であった。野間宏といえ、野間は井上が関西時代に詩の友人として親しくつき合った間柄であったが、その野間宏が小説で戦後の文壇にはなばなく登場してきたことが、井上に何らかの刺戟を与えたのかもしれない。しかし、井上の静かな作風が世に認められるまでには、まだなにがしかの時日を必要とした。しかし井上は、『闘牛』『猟銃』を書いたのち、昭和二十三年の末には、毎日新聞の大阪本社から、東京本社の書籍部副部長として転任し、単身上京して葛飾区の妙法寺に仮住まいし、小説家として立とうという決意を固めている。

『猟銃』執筆の頃のことについて、竹中郁がおもしろいエピソードを伝えている。ある日、井上靖が百枚ほどの『猟銃』の原稿を持ってきたので、それを読んで、一寸した意見をのべた。ほんの僅かの風俗上の好みについての意見だったが、すぐさま一日おいて、また原稿を持って

きた。見ると新原稿だが、別の小説ではなく、百枚からの『猟銃』を初めから書き直したものである。竹中は驚き、あきれて、これで身体は平気なのかと聞くと、「こうしないと気がすまないんです」と答えたということである。

こうして何度か推敲を重ねた『猟銃』は、やがて、当時和田芳恵が編集していた雑誌「日本小説」に掲載されることになり、すでに組み上がって発表されるばかりになっていたら、幸か不幸か雑誌がつぶれてしまった。宙に浮いた『猟銃』は次に、佐藤春夫の手に渡った。これを一読した佐藤春夫に激励されたことが、井上にとっては余程感動的なことであつたらしい。その時の感動を井上は、『私の自己形成史』のなかで次のように書いている。

「私は処女作の『猟銃』を書いた時、それを人を介して佐藤春夫氏に読んでいただき、そうしたことで佐藤春夫氏にお目にかかる機会を持ったが、その日、自宅へ帰って机に向い、蟬の声を聞いているうちに、めまいと嘔吐感を感じて、その場に俯伏した。この時私はふと伊東静雄の『庭の蟬』といった詩の一節を思い出した。それには蟬の声の中に、一種前生の思いとめまいを伴う嘔吐感があることを指摘してあつた。私は自分の作品を佐藤春夫氏に読んでいただいた昂奮の中で、何とも言えず伊東静雄を懐しく思った。その時の氏に対する親近感、自分ながら異常に思われるほど烈しいものであつた。」

これは、昭和二十四年六月のことである。ついで『猟銃』は、佐藤春夫の手から大仏次郎、今日出海の手を経て、「文学界」の編集長をしていた上林吾郎の手に渡り、この年の十月号の「文学界」に発表された。つづいて同誌十二月号に『闘牛』が発表され、さらに同月、「別冊文芸春秋」の十四号に『通夜の客』が発表されている。作品が世に出る経路というものは、まったく不思議なものである。いいものが、ただちに認められて一挙に世に出ることももちろんある。しかし、たとえいいものでも、時代にマッチしなければ、そのまま忘れ去られて行くこともあるであろう。その間には、時代の好みということと同時に、運不運ということも大きく作用するであろう。いずれにせよ、『猟銃』の沈潜した抒情とスマートな小説美学が認められるまでには、紆余曲折の数年間を要したのである。そして、井上靖の作品は幸運の波に乗ったと言っただけであろう。

『闘牛』は、昭和二十四年度下半期の芥川賞候補作に推され、昭和二十五年二月、選考委員のほとんど全員一致をもって、第二十二回芥川賞受賞作に決定した。ただ、受賞作は『闘牛』ということになっているが、当時の選考委員の言葉を読んでみても、『猟銃』『闘牛』の二作を頭に置いての選考であったことが想像される。当時の選考委員の言葉を拾ってみよう。

「もう完全に出来上った作家だ。何も云うことはない。『闘牛』はうまい小説のサンプル。

『猟銃』はロマンチックな一陣の風が吹いている。」(丹羽文雄)

「わが国では珍しい、既に成熟を感じさせる一個の文学的才能の所産である。」(岸田国士)

「練達の作者には、計算の狂いがないが、しかし主人公の性格の心理及びその恋愛の書き方は、あざやかなようで実は動揺と晦冥とを残しているのは、かえって作者の未来を約束している。」(川端康成)

川端康成が、井上靖の二つの処女作について、「あざやかなようで実は動揺と晦冥とを残している」と指摘しているのは、井上がドラマチックな作家というよりは、むしろ詩人的な作家であるということを見抜いた言葉として、注目に値する。

《白い河床》

『猟銃』は書簡体の小説であるが、冒頭にまず、『猟銃』と題する散文詩が紹介される。これは小説の中では、小説の語り手が、天城山で見かけた獵人の後姿から想を得て作った詩で、「獵友」という日本獵人倶楽部の機関誌に発表したことになっている。しかし同名の散文詩は、既に小説『猟銃』が執筆される以前に発表され、詩集『北国』の中にも収められている。

井上靖は、小説で文壇に登場する以前に既にいくつかの詩を発表しており（そのほとんどは詩集『北国』に収められている）、それらの詩のモチーフと題名がそのまま小説に使われている例は多いが、『猟銃』もまたそのような作品のひとつである。

その人は大きなマドロスパイプを銜え、セッターを先に立て、長靴で霜柱を踏みしだき乍ら、初冬の天城の間道の叢をゆっくり分け登って行った。二十五発の銃弾の腰帯、黒褐色の革の上衣、その上に置かれたチャアチル二連銃、生きものの命断つ白く光れる鋼鉄の器具で、かくも冷たく武装しなければならぬものは何であろうか。行きずりのその長身の獵人の背後姿に、私はなぜか強く心惹かれた。

その後、都会の駅や盛り場の夜更けなどで、私はふと、ああ、あの獵人のように歩きたいと思うことがある。ゆっくりと、静かに、冷たく……。そんなときまって私の脇の中で、獵人の背景をなすものは、初冬の天城の冷たい背景ではなく、どこか落莫とした白い河床であった。そして一個の磨き光れる猟銃は、中年の孤独なる精神と肉体の双方に、同時にしみ入るような重量感を捺印しながら、生きものに照準された時は決して見せない、ふしぎな血ぬられた美しさを放射しているのであった。